

鏡の思惟（一）

——ライプニッツにおけるモナドの働きについて——

山下 豊

鏡という形象が人間の形而上学的な想像力あるいは思惟にとって際立って魅惑的なものでありえたのは、いうまでもなく、その入映すVという働きによる。事実、鏡の比喩は無数の宗教的・文学的・哲学的なテクストの内部のいたるところでさまざまな色合いをもって語られてきたのである。しかし、鏡の入映すVという働きが、ただ単に事物とか自分の姿とかを正確にあるいは不正確に入写すVという入写実V入写像Vの意味に尽きるとすれば、鏡の形象は想像力や思惟にとってさほど問題とはならなかったであろう。むしろ、鏡そのものがその起源から (ab origine) 想像力を喚起し、また魅了すると同時に、想像力は鏡の機能と形象の内に別の新たな意味の地平を探りあて、それを思惟に委ねたのではないだろうか。少なくとも、かつてなされてきた鏡の思惟——鏡について思惟することと同時に鏡によって思惟すること——を追思惟する時、鏡はその源初において (in principio) 形而上学的な想像力と共にあったと想定することができるであろう。この鏡と想像力の相補的な関係が意味することは、鏡そのものが想像力と思惟にとつて、さらに人間の技術 (ars) にとって卓越した象徴 (Symbol) となりえた、ということにほかならない。

ところで、思惟をしてある具体的な意味をもつ形象から象徴という別の新たな意味の地平へと導く人間の精神的機能とは何であるのか。すなわち、形象からの超越と新たな意味地平の開示を喚起するもの、いま仮にそれを形而上学

的想像力と名づけておこう。形而上学的想像力は思惟を形象に引き寄せ、そこから意味の超越へと導いていく。この超越を思惟は追いつながら、テキストの内部へと言語化していく。この場合、思惟によってテキストという全体性の内に折り込まれた意味の超越が比喩(Metapher)と呼ばれるのである。言い換えれば、形而上学的想像力は思惟を誘惑し、思惟は形而上学的想像力を制御しながら、その超越を比喩として言語化する。しかしこの時、意味地平の超越にはもう一つ別の可能性が残されている。超越が形象の意味を覆いつくし、超越の内部に形象が取り込まれてしまう場合、テキストが思惟を統制してしまう。それが例えば神話(Mythos, Mythe)である。神話的なテキストにおいては、思惟はもはやテキスト全体にわたって想像力を支配することはできない。思惟は想像力の軌跡を伝えられるだけである。テキスト内の形象は比喩ではなく、他のあらゆるものと等価的な実在物として現前する。つまり、テキスト全体が世界の原型なのであり、現実世界はこのテキストの再現にすぎないということになる。このような形象の意味地平の外在的超越に対して、あくまでも形象本来の意味との連関を保ちながら別の意味地平を開示する内在的超越が思惟の自己判断によってテキストの内部に比喩として定位されるのである。すなわち、形而上学的想像力は思惟によってテキストの内部に織り込まれていくのである。

ここで指摘しておきたいことは、形而上学的想像力と思惟との共働が、形而上学的なテキストの基礎的な下書きを作成するということである。その場合、この共働が最も明白に現れでるのが、テキスト内の比喩においてである。というのも、この共働関係は思惟によって痕跡を残さないように注意深く埋められるからである。しかも、時としてこうした思惟の自立的な装いすなわち形而上学的想像力と思惟との隠された共犯的關係が、形而上学批判の論拠とされることもあるが、ここではむしろこの共犯關係に積極的な意義を認めようと試みる。すなわち、本稿の意図は、ライプニッツにおける鏡の思惟を追思惟することによって、形而上学的想像力と思惟との共働、具体的には鏡の比喩とモナド概念との関係を解釈することにある。

1. 鏡の思惟　　いうまでもなく鏡の形象にとって△映す▽ということは本来的な機能である。しかし、△映す▽ということはいったい形而上学的想像力にとってどのような意味をもちえたのであろうか。ここでは、鏡の思惟にとって基本的な鏡の存在性格を簡単に素描するために、鏡の言葉をめぐるいくつかの考察を加えておこう。なぜならば、言葉の語源的な意味理解に目を向けることは、いわば人間の想像力に根源的なある傾向性をおぼろげながらも把握しえる一つの方法であると思われるからである。

(a) 鏡の存在性格　例えば、鏡は、古代日本人の心性にとっては「かがみ(加賀美)」すなわち「かがみ(景霊)」を意味していたようである。この場合、「景(加賀)」は影である以前に「日月の光」の意であり、また「み」は「見る」ではなく「霊(みたま、みかげ)」の「み」であるという説に基づいている⁽⁴⁾。一般的に知られている語源説による「影見(＝姿を映し見る)」に先立って、このような語源があったとすれば、鏡は光の霊にほかならない。

こうした古代日本人の心性に抜き難い影響を与えた中国道教の理論では、鏡は「光を含み貌を写す(含光写貌)」とされていた。ここでも鏡は光を宿すものであった。それゆえ、鏡はまた「象を尚び霊に通じる(尚象通霊)」のである⁽⁵⁾。このように鏡を熟視する思惟によれば、鏡は事物を映すがゆえに鏡なのではなく、光を宿しそれ自体が光であるがゆえに鏡たりえるのである。闇が光に転じる場あるいは闇が光に転じるという働きそのもの、それが鏡であり、それゆえ、また同時に鏡は魂の現成する場あるいはその働きを象徴するものでもありえた。

(b) 鏡のポイエーシス的性格　鏡が光を含み、自らが光となるならば、鏡の△映す▽働きは、もはや単なる△写す▽という意味に尽きると思えない。△映す▽働きとは、そこに潜むものを△移す▽働きであり、それは同時にそこに△現す▽こと、△顕す▽ことでもある⁽⁶⁾。△映す▽働きによってはじめてそこに潜むものが「うつつ(現実)」となって現われでてくる。言い換えれば、ものの顕在化、現実化の働きの背後には、△現す▽△映す▽△移す▽とい

う働きがある。それ自体ですでに頭わであるかのように見えるものは、しかし自己が自己を△映す▽△移す▽という働きによって自らを「うつつ」の世界へと表現していくものなのである。こうした鏡の△映す▽という自己表現的な働きは、自己を世界の内へと「再―現前化 (re-presentatio)」することによってはじめて現実的で具体的な自己の「現前 (presentatio)」を確保しえるという存在の働きを示唆する。△映す▽という働きは、自己を世界の内に世界と共に△現す(顯す)▽ことにほかならない。すなわち、存在あるいは世界の現前は、自己が自己を△映す▽という働き、つまり△映す▽ものが△映される▽ものになるという働きによって支えられているのである。

(c) 鏡のテオリーア的性格 さらに、一般的にいうならば、鏡の△映す▽という機能は△見る▽という行為(プラクシス)を誘発する。人間は鏡を通じて (per speculum) 鏡の内に (in speculo) 自分とその背後の世界を△映し見る▽。ここでは、鏡の言葉 (speculum, miroir, Spiegel) が、△見る (specere, mirare)▽という行為にもとづいて語られる。それは同時に驚嘆する (mirari) ことから、不思議、奇跡 (miraculum) の感情にまでも広がってゆくことになる。そこには、鏡に△映す▽ものが△映される▽という存在の一つの働きに対して、むしろ鏡によって△見るもの▽が△見られるもの▽へと分裂、差異化することへの驚きがある。鏡は人間を△見る▽主体と△見られる▽客体とにいやおうなく分裂せしめる。それによって人間は、自分自身を認識の対象にすることができることへの喜びと驚きに浸ると同時に、今度は自己(△見る▽主体)と対象化された自己(△見られた▽客体)との同一化への期待と不安に慄くようになるのである。こうした鏡の差異化し再び同一化する働きは、すぐれて人間の眼の比喩となりえた。さらに、鏡による△見るもの▽と△見られるもの▽との一致は、真理認識の卓越した範型でもありえた。ここで問題になるものは、あらゆる存在の働きとしての△映す▽鏡ではなく、鏡を見つめ鏡に見つめられる人間という卓越した認識主体なのである。この時、鏡は意識の自己反省の場、すなわち鑑みる場にほかならない。それゆえ、△映す▽鏡から△見る▽鏡への移行は、存在から意識への想像的審級を意味しているのである。

(d) 鏡の通路的、境界的性格 さらにいえば、鏡は入見るものVを入見られるものVに一瞬にして転換する。鏡を包み込んでいた世界が逆に鏡によって包み込まれるのである。鏡によって世界は異界へと変貌する。それは、現実世界の基盤の弱さ、不確実性を暗示する。鏡はなんらかの背後世界の可能性を人間に示唆する。人間は鏡を通じてしか自らの背後を見ることはできないのである。それゆえ、鏡はまた「神のよります境」⁽⁴⁾でもありえた。しかし、この神は得体の知れない神である。それは呪わしいものであるかも知れないし、ユートピアであるかも知れない。いずれにせよ、鏡という境界を潜らねば解らないことなのである。それゆえにこそ、鏡は人間の想像力を喚起してやまないのである⁽⁵⁾。そして、かつて語られてきた鏡の比喩は、思惟を導いてきた形而上学的想像力の痕跡なのである。

もちろんこうした前哲学的な鏡の思惟は哲学の本来的な営みと厳密さからは問題とはなりえないであろう。しかし、鏡という形象によって知られうる形而上学的想像力の誘導と広がりとは、哲学的思惟の営みがその可能性と具体性をそこから汲み取ることできる土壌の一つなのである。

2. 意識的自我から存在一般へ (個体的実体と鏡の比喩) 一六八六年に執筆された『形而上学叙説 (Discours de Métaphysique)』という論文において、ライプニッツは自らの哲学的思惟の方向を決定づけた。この論文を支える基礎的な概念が、「個体的実体 (la substance individuelle)」である。個体的実体とは、自らの個体的内実、特質を自己の内に完全に含み、それ自体で自立することのできる「完足的な存在 (le être complet)」(GP. IV. 433, DM. §8) にはかならない。ライプニッツの哲学的思惟の主要な関心は、常に個体的な生と世界との関係に向けられてきた。つまり、個体的実体の概念はそれに対するライプニッツ形而上学における初期の基本的な解答を意味していた。

「個体的実体 (la substance singulière) は各々自分自身の流儀にしたがって宇宙全体を表出している (exprimer tout l'univers à sa manière)。⁽⁶⁾ 各々、その概念の内にはそのあらゆる出来事 (tous ses événements) が含

まれているとともに、出来事の生起する際のあらゆる状態 (routes leurs circonstances) も外界の事物の全系列 (toute la suite des choses exterieures) も含まれてゐる」(GP. II. 12, § 9)。

ここでいう個別の実体は個体的実体と同義である。個体的実体は自己の内実の内に自己と関係する世界という出来事の全系列を含むものである。すなわち、個体的な生は豫め自己と世界との諸連関の一切を先取りして無時間的に包含 (complicatio) している。この自己と関係する世界を時間的に展開 (explicatio) してゆく働きが表出である。かくして、包含と展開の働きの差異 (自分流儀にということ) がそれぞれの個体概念を現象せしめるのである。

このような個体的実体の概念はいったい何にもとづいて思惟されているのであろうか。それは、意識的自我 (moi, ego) と呼ばれる人間の個体的な自我にはかならない。ライプニッツは自我を手引きとして人間以外の実体一般を解明しようとする。自我は、ライプニッツによれば、「理性をもつ精神 (l'âme raisonnable)」すなわち「理性的精神 (l'esprit)」であり、それ以外の実体一般は、ただの「精神 (l'être)」と考えられている。しかし、理性的精神とただの精神との間に本質的な差異があるわけではない。理性的精神はその働きにおいてただの精神から卓越しているだけなのである。むしろ、この卓越は決定的ではあるけれども、働きの根源的な在り方は同じである。

「理性的精神の卓越 (Excellence des Esprit)。理性的精神は世界よりもむしろ神を表出し、他の単純な実体は神よりもむしろ世界を表出している」(GP. II. 14, § 35)。

つまり、精神はその働きにおいて単純 (simple) なのであるにすぎない。

しかしここで、単純である精神に比して卓越する理性的精神の働きが鏡の比喻によって語りだされることになる。

「実体の本性、目的、力および働きは、神および宇宙を表出することにほかならないから、自分のしていることについての認識をもって神および宇宙を表出している実体、神および宇宙に関する偉大な真理を知ることのできる実体が、動物的であって真理を知る力のないもの (本性) や、まったく知覚も認識も具えていないものより

は、比較にならないほどすぐれて神および宇宙を表出しているということは疑いえない。この悟性的な精神 (*les substances intelligentes*) とさうでない実体との差異は、鏡と眼で見る者との間に (*entre le miroir et celui qui voit*) 存する差異はど大きい」(GP. IV. 460. DM. § 35)。

ここでの鏡の比喩は二重の意味を担っている。個体的な生は自己と世界、つまり世界を含んだ自己を絶えず表出することによって存在する。この表出の働きが鏡の△映す▽働きと重ね合わされている。存在は鏡のように自己と世界とを△映す▽のである。しかし、存在は自己自身を△映す▽のであって、鏡のように自己の前にあるものを△映す▽のではない。それゆえ、存在の比喩としての神と世界を映す鏡は、のちに「生ける鏡」すなわち自己自身を自らの力で表現する鏡へと審級してゆくのである。それは同時に、個体的実体から存在一般へ、さらにモナド概念への思惟の深まりと対応することになる。ただ、ここではもう一つ別の意味が強調されている。鏡のただ△映す▽という受動的な性格に対して、理性的精神はより能動的にしかもより完全に神と世界を見ることのできる△まなざし▽なのである。

こうした意味での鏡の比喩はすでに伝統的なものであったし、またよく知られていたものの一つであった。その解釈的な源泉は『新約聖書』に求めることができる。そこでは、「今私たちは、鏡を見るようにぼんやりと見ている。だがそのときには顔と顔をあわせて見るであらう⁹⁾」(コリント人への第一の手紙 12:12) と語られている。理性的精神は存在の鏡を超えて直接神に向けられた△まなざし▽となることができる。神と△まなざし▽を交わすことのできる理性的精神は、それゆえライブニツにとっては本来的に「神の家の子 (*les enfants de la maison de Dieu*)」「神の似姿 (*son image*)」(GP. IV. 461. DM. § 36) でありえたのである。しかし、こうした存在に対する理性の卓越を認めながらも、ライブニツの哲学的思惟は自我ではなく、むしろ理性的精神とそれ以外の諸精神との共通の存在基盤の解明へと向けられたのである。そして、あらゆるものの存在把握という思惟の試みと呼応して、ライブニツの形而上学的想像力は、存在の鏡に優越する理性的精神の△まなざし▽ではなく、むしろ存在の鏡そのものへと向か

う。それは、例えば『新約聖書』の別の箇所で語られている「そこで私たちはみな覆いを顔に垂れず鏡に映すように主の栄光を映し、霊なる主によってますます光栄を増すその同じ姿に変わる」(コリント人への第二の手紙3:18)という場合の \wedge 鏡 \vee をあらゆる存在の根源に見つめてゆくことでもある、ということもできるであろう。

それゆえ、ライブニツツによれば、存在一般すなわち実体(精神)はまさにすべて神と世界を映す鏡なのである。「すべての実体は一つのまとまった世界(un monde entier)のようなものであり、神の鏡もしくは全宇宙の鏡(un miroir de Dieu ou bien de tout l'univers)のようなものである。実体は各々自分流儀にしたがって全宇宙を表出する。それは、いわば、同じ都市でもそれを眺める人のさまざまな位置によって個々別々に表現(représenter)されるようなものである。

それによって、宇宙は、いわば、実体が存在するだけの数をもって多重化(multiplier)されることになり、同様に神の光栄も神の業に関する互いに異なった表現と同じだけの数をもって倍される(redoubler)ことになる。

また、すべての実体は神の無限の知恵と全能との性質をいくらか帯び、力のおよぶかぎり神を模倣するということもいえる。その証拠に、実体は過去現在未来において宇宙に生起するすべてのことを混雑にはあるが、表出している」(GP. IV. 434. DM. §9)。

ここでいわれている同一都市の内部での無数の眺望という比喻は、鏡の \wedge 映す \vee という働きが遠近法(perspective)的な構図をもつ、ということを示している。存在の表出あるいは表現の働きは常にある奥行をもっている。それは空間的にも時間的にも無限に広がっている。ただ存在の力と働きの程度によって、眺望は判明なものから混雑なものへと弱まってゆくのである。しかし、この眺望は、必ず同一都市すなわち唯一の宇宙の内部にあって、都市(宇宙)を構成する諸関係の系列を自己のものとして映しだす。それゆえ、都市(宇宙)は無数の眺望によって遠近法的に表現されることになる。一つの眺望はいつでも他の無数の眺望と重なり合う。こうした無数の存在による遠近法的な多重

化が世界の具体的な内実を生みだす。現象世界の實在性とは、まさしく無数の眺望の集積 (amas, aggregatum) によって支えられるものなのである。このような存在の遠近法的表出という働きが、いま鏡のへ映すへ働きにおいて語られる。無数の鏡が互いに映しあうところに世界が現象してくるのである。では、鏡それ自体とは何であるのか。それは世界の遠近法的な視点すなわち遠近法の消失点にほかならない。鏡は鏡自身を映しえない。存在はその働きによって現われ知られるだけであり、存在そのものの根源は現われえず知られないのである。にもかかわらず、存在が鏡でありえるのは、それ自身の内に世界の内なる自己を遠近法的に集中 (concentration) しているからである。すなわち、存在は自己の視点を中心として世界を豫め自己の内に集約する一つの「縮約された世界 (mundus concentratus)」なのである。存在一般は映すという働きと世界の内なる自己という内実をもつ。それゆえ、鏡として思惟されえたのである。

3. 存在一般からモノアドへ (モノアドと鏡の比喩) 一六八六年以降に構想され、一六九八年から一七一四年にかけて形成されたモノアド (la monade) 概念は、ライプニッツ形而上学の体系化を主導する中心概念である。ライプニッツは存在の本質をへ働き (action, agir) として把握しようとする。したがって、実体の実体性 (die Substantialität der Substanz) をなすものは働きそのものである。「実体とは働くことのできる存在である (La Substance est un Etre capable d'Action)」(GP. VI. 598. PN. §1)。¹⁾ 実体を構成するもの、それが働きであり、この純粋な働きを意味するもの、それがモノアドにはかならない。それゆえ、モノアドは「単純な実体 (la substance simple)」(GP. VI. 607. MO. §1) として語られるのである。「単純な」といわれるのは、モノアドが実体性を構成する最も基本的な性質すなわち「力 (la force)」とその「働き (agir)」を意味するものであるからである。力とは、現象の實在性を支えるもはや分割不可能な最小の基本単位であり、その働きは、現象を生みだすために必要なあらゆる存在に共通の基本形式であ

るがゆえに、単純なのである。それゆえ、モナドはあらゆる個体的生の内に入り込み (entrer dans)、個体的生とその現象を構成することができる。このあらゆるモナドの働きに共通な在り方が「表現 (représentation)」なのである。つまり、力と表現的本性の一体化した働きが、ライブニッツによってモナドとして思惟されたものにはかならない。

モナドは自らの力によって自発的に世界を含む自己を表現する。それによって、モナドはあらゆる現象の自発的な展開を可能にする。この自発性 (spontanéité) のゆえに、モナドは「生ける鏡 (un miroir vivant)」なのである。

「各々のモナドは、自分自身の視点にしたがって宇宙を表現し宇宙そのものと同様に規則だっている生ける鏡すなわち内的な働きをそなえた鏡なのである」(GP. VI. 599. PN. §3)。

これによって、 \wedge 映す \vee 鏡から \wedge 生ける \vee 鏡へと向けられたライブニッツの形而上学的想像力は、個体的実体から自発的に働きたすモナド概念への哲学的思惟の深まりと呼応している、ということが理解されるであろう。

鏡の \wedge 映す \vee 働きたすなわちモナドの表現的本性 (la nature représentative) の働きとは、表象 (la perception) と欲求 (l'appétition) といわれる働きである。表象は主として宇宙の空間的な取り込みと展開であり、欲求はむしろ宇宙の時間的なそれである。その働きによってモナドは宇宙を空間的・時間的に包含し展開する。言い換えれば、モナドはそれ自身で宇宙を形成し、宇宙の内に自己を定位し、宇宙を現象へともたらず。しかし、すべてのモナドは唯一の宇宙すなわち神の宇宙に関わるのであって、それゆえモナドの働きは例外なく宇宙の秩序に従うことになる。

「宇宙をめいめいの視点にしたがって表現している各々の生ける鏡すなわち各々のモナド、各々の実体的中心のもつ表象と欲求は、他のすべてのものと相容れる (compatible) かぎり最もよく法則に適合している」(GP. VI. 603f. PN. §12)。

すべてのモナドの表現が相互に相容れること、表現の共可能性 (compossible) は、すべてのモナドが、異なる視点から自分の力に応じてではあるが、同一の宇宙を取り入れているということにもとづいている。モナドはそれ自身が

宇宙の独自の縮図である。しかも、それ自身の力においては完全な縮図なのである。

「各実体は自分ひとりだけでも内に宇宙全体を表出している。自分の関係もしくは視点にしたがってものを映す完全な鏡 (un parfait miroir) である。……

各実体は別々に自分の流儀にしたがって宇宙全体を表現しているのであるから、すべてのことは各実体自身の根底から (du propre fonds de chacune) 生起する (se produisent)」(GP. IV. 475)。

モナドの表現するもの、それは自己とそれ以外のモナドとの関係すなわち自己と宇宙との関係 (rapports) にほかならない。したがって、それぞれの縮図化された宇宙の諸関係がそれぞれのモナドによって現前化されることによって世界が現象してくるのである。現象する世界とは、モナドによって共現前化されたものなのである。

「創造されたすべてのものがその各々に対して、また各々が他のすべてに対してもこの連結もしくは適応 (cette Liaison ou cet accommodement) によって、単純な実体はそれぞれ他のすべての実体を表出する関係をもち、したがって宇宙の永久の生ける鏡 (un miroir vivant perpétuel de l'univers) となる (GP. VI. 616, MO. § 56)

宇宙を永遠に生きる鏡、それがモナドの働きなのであり、同時にそれは存在の本質について語ろうとしたライプニッツ自身の形而上学的想像力の一つの帰結でもあった。鏡が世界を映すように、存在は自己の内なる世界を表現する。そして、鏡が他の鏡によって映されるように、存在もまた他の存在によって表現される。この表現的な一致、重ね合わせ、調和が現実の世界を存在論的に構成する。現実はもろもろの表現によって倍され (redoubler) され、重層化 (multiplier) される。この増幅する世界の内にあって存在は世界を自己の内へと取り集めながら一つの世界を生きてゆくのである。すべての存在は一つの世界 (cosmos) へと向かう、しかしその世界は存在の無限の多様性が集積する場なのである。存在は自己の内に世界を表現し、世界の内へと自己を表現する。この働きによってはじめて存在は

自己と世界を現実化する。存在にとって自己の内なる世界とは生の働きそのものであり、その働きの現われが現象世界なのである。それゆえ、働きなくしては生も存在もありえない。これがライプニッツの哲学的確信であった。

4. 要約

すでに指摘した通り、ライプニッツにとっては△映す▽鏡から△生ける▽鏡への形而上学的想像力の審級は、個体的実体からモノアドへの哲学的思惟の深まりと呼応するものであった。テキスト内のある比喩がテキストとともに変化するということは、テキスト全体を支える思惟が全体性を損なうことなく深まっていったことの証左でもある。ライプニッツは存在を働きにおいて思惟する。それは同時に鏡のポイエーシスの性格の強調でもある。それは△見るもの▽から△働くもの▽への深化を意味する。モノアドは働きそのものを指示する概念なのである。

これまでに述べてきたことは鏡の比喩とライプニッツの哲学的思惟との連関にすぎない。さらに問われるべきは、鏡の根源すなわちモノアド概念の存在論的根拠の問題であり、また鏡の形象へと引きつけられた形而上学的想像力の可能性への問いである。鏡はそれ自体を映しえない。とすれば、モノアドの遠近法的自己表現を支える視点をモノアド自身は表現しえないのではないか。働きそれ自体の根源はどこに求められるべきなのか。ライプニッツはそれを神の働きの内に思惟する。それゆえ、モノアドにおいての神の働きが、言い換えれば△生ける鏡▽においてその根源をなす△神性の鏡▽が問われるべきであろう。

(未完)

註

- (1) 原田大六『卓弥呼の鏡』、六興出版、一九七八年、三三頁参照。
- (2) 福永光司『道教思想史研究』、岩波書店、一九八七年、二一三頁参照。
- (3) 坂部 恵『仮面の解釈学』、東京大学出版会、一九七六年、一九一―六頁参照。
- (4) 諏訪春雄『聖と俗のドラマツルギー』、学芸書林、一九八八年、二二四頁参照。
- (5) 先の註で取り上げたものの以外の主な参考文献には以下のものがある。森 浩一編『日本古代文化の探究・鏡』、社会思想社、

一九七八年。多田智満子『鏡のテオリア』、大和書房、一九七七年。川崎寿彦『鏡のマニエリスム・ルネッサンス想像力の側面』、研究社、一九七八年。森本和夫『反西洋と非西洋』、春秋社、一九八一年。

- (6) ライプニッツからの引用はすべて『ライプニッツ哲学著作集』(Die philosophischen Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz, Hrsg. v. C. I. Gerhardt, Bd I-VII, Berlin 1875-1890, Neudruck: Hildesheim 1960-1961, (Abk.: GP) 以下、巻数、頁数、論文名の略記、章節番号の順に引用箇所を示した。論文名の略記号は次の通り。

DM : Discours de Métaphysique (1686) 「形而上学叙説」

PN : Principes de la nature et de la grâce, fondés en raison (1714) 「理性に基づく自然と恩寵の原理」

MO : (sogenante) Monadologie (1714) 「单子論」

さらに、邦訳は河野与一訳『ライプニッツ形而上学叙説』、岩波書店(岩波文庫)、一九五〇年、ならびに同訳『单子論』、岩波書店(岩波文庫)、一九五一年によったが、必要に応じて若干の字句を改めた。

フェデリコ・バルバラ訳『聖書』、講談社、一九八〇年、二六八頁参照。

- (8) 同右、二七七頁参照。

——大学院博士課程後期課程——